

## 夏秋ギク「岩の白扇」の無側枝性発現技術

出口 浩  
(長崎県総合農林試験場)

Hiroshi DEGUCHI :  
Method of Vanishing Lateral Bud in Chrysanthemum  
'Iwanohakusen'

無側枝性ギク「岩の白扇」は、7月上旬開花までは側枝が発生し、摘芽・摘蕾作業は省力とはならない。後藤ら<sup>1)</sup>によれば、午前10:00まで換気しないことによって無側枝性の発現を試みたが、側枝は発生し、また、切り花品質も低下したと報告している。そこで、午前中の高温処理ではなく、日中の高温処理によって品質を低下させることなく無側枝性を発現できないか検討する。

## 1. 材料および方法

試験1:「岩の白扇」を供試し、2000年3月1日に直挿しした。仕立ては、無摘心栽培とし、直挿しから深夜4時間電照を行い、4月20日に消灯した。試験ハウスは、奥行き20mのビニルハウスを中央で仕切り、換気は、①慣行区:サイド換気+肩換気、②高温区:肩換気とした。処理は、直挿し後30日後の4月1日からすべての株が発蕾した5月19日まで行った。

試験2:「岩の白扇」を供試し、2001年2月15日に直挿しした。仕立ては、無摘心栽培とし、直挿しから深夜4時間電照を行い、4月5日に消灯した。処理は試験1と同様に行い、直挿し30日後の3月15日からすべての株が発蕾した5月12日まで行った。

## 2. 結果および考察

試験1:高温区では、31.4節目より上位の10.9節が無側枝性を発現した(第1表)。この処理期間中の最高温

第1表 「岩の白扇」の6月中旬開花における高温処理と無側枝性の発現

試験区	全節数	消失節数	消失節位
慣行	46.7節	1.0節	46.3節
高温	47.1	10.9	31.4

注) 直挿し: 3/1, 消灯: 4/20

度の平均は、慣行区の29.3℃に対して、高温区は34.6℃と5℃高く推移したのに対し、日平均温度は、慣行区の18.2℃に対して高温区は19.7℃と差は小さかった(第2表)。このことから、高温区による側枝の消失は日中の

第2表 処理期間中の平均温度

試験区	日平均	最高温度
慣行	18.2℃	29.3℃
高温	19.7	34.6
差	+1.5	+5.3

注) 直挿し: 3/1, 消灯: 4/20

温度上昇によるものと考えられる。高温処理によって切り花品質は低下しなかった。

試験2:開花時期を早めての試験であったため、無側枝性は高温区の供試株数の48.3%で発現し、発現株の平均側枝消失節数は2.1節となった(第3表)。このときの側枝消失節位は37節で始まっている(第3表)。ここで、

第3表 「岩の白扇」の6月上旬開花における高温処理と無側枝性の発現

試験区	全節数	消失節数	消失節位
慣行	50.3節	一節	一節
高温	50.6	2.1	36.9

注) 直挿し: 2/15, 消灯: 4/5

37節目の葉が形成されたのは4月13日以降であると考えられ、さらにその部分の側枝が形成されるのはこれ以降と考えられる。第4表に、消灯時の葉数(展開葉数+未展開葉数)を基準として、37節目の葉が形成され、側枝が分化したと考えられる4月13日から4月19日の最高温度は32.8℃となっており、それ以前の温度よりも高い水準で推移している(第4表)。したがって、33℃付近に

第4表 最高温度の時期別推移

時期	3/30~4/5	4/6~4/12	4/13~4/19
葉数	23~29枚	30~36枚	37~44枚
慣行	23.8℃	26.5℃	27.0℃
高温	30.1	31.5	32.8

注) 葉数: 4/6(消灯時)を基準とした推定葉数  
展開葉数+未展開葉数

無側枝性発現の最低限界温度があるものと考えられる。

以上の結果、「岩の白扇」の無側枝性発現は33℃以上の高温により誘起されるものと考えられ、ハウスの肩換気による高温管理は切り花品質を低下させずに無側枝性を発現できる技術であるといえる。

## 引用文献

- 1) 後藤 哲・富満龍徳:九農研 61, 193, 1998.